～シリーズ～「JICA で働く人たちのヒューマンストーリー」

■第３回■　谷口恵理さん（ブラジリア出張所　現地職員）

“これまでの人生を振り返ると、過去の出会いや経験は全てが今に繋がっていると感じます。
私が今ここＪＩＣＡブラジリア出張所で仕事ができるように必要な出会い・経験だったと確信します。”

JICA ブラジリアで採用されて４年半が過ぎた谷口さん。持ち前の粘り強さと業務の質向上への絶え間ない工夫・努力が評価され、このほどブラジリア業務班長に抜擢。これまでの人生を振り返りながら、JICA で働く意味について語って頂いた。

千葉県野田市で生まれ育った。
当時では珍しい、共働きの家庭だった。父親はエンジニア、母親は音楽関連の仕事に携わり、仕事に忙しい母に代わりやんちゃな弟２人の面倒をよく見る、しっかりもののお姉さんだった。

小学校から高校まで吹奏楽部に所属した。担当はトランペットやホルーン。その傍ら、ピアノも習っていた。
母親の影響もあって音楽の世界に憧れた谷口さん。高校時代はごく自然の流れで音大受験の準備を進めていた。

しかし、あるラジオ番組との出会いが、その後の進路を大きく変えた。
ブラジル出身の歌手小野リサさんがパーソナリティを務める「サウージ！サウダージ！」だ。
「当時ではボサノバは珍しかったのですが、私はその魅力にすっかり取り憑かれ、いつしかブラジルに憧れるようになりました。」
こうして谷口さんは、外語大学のポルトガル語学科に進むことにした。
在学中、交換留学プログラムの一環でブラジリア大学に留学することとなった。「勉強に追い付くのは大変でしたが、とても刺激的でした。ブラジリア中心部には官僚や政治家等の富裕層が住む一方、ちょっと離れて郊外に行けば住居や生活インフラが脆弱な地区が広がる。リオやサンパウロのように大邸宅のすぐ横にファベーラがあるというのとも違って、エリート層からは貧しい人たちの生活が見えないよう分断されたつくりになっているのがブラジリア。『ブラジリアはブラジル社会の縮図』とも言われることに妙に納得したのを覚えています。」
ブラジル留学は 10 か月と短かったが、ブラジリアでの生活は谷口さんの人生観に変化をもたらした。もっとブラジル社会を学びたい、そう思った。

大学卒業後は大学院に進み、経済開発政策を研究した。修士論文では低所得者向け住居を扱った。その後博士課程まで進んだが、学んだ理論を応用できる機会を求めるようになった谷口さんは、米州開発銀行でのインターンシッププログラムに参加する等、国際協力の実務経験を得る機会に触れた。また在学中には在ブラジル日本大使館にて、経済分野の専門調査員として 2 年間勤務した。
こうした折、大使館での仕事上で知り合った国際協力銀行（JBIC。後に円借款部門は JICA と統合。）の駐在員より声を掛けられた。
その人の仕事ぶりは以前から谷口さんにとって強烈に印象に残っていた。駐在員として、軽いフットワークで各地を飛び回っては新しい案件を発掘するその姿に憧れていたのだ。
こうしたきっかけにより、東京本部の専門調査員ポストに応募、採用。「国際協力への初めの第一歩が踏み出せる！」そう思ったという。

現在まで続く谷口さんと JICA との縁は、こうして始まったのだ。谷口さん 27 歳の時のことだった。JBIC では中米エルサルバドルの円借款案件「ラ・ウニオン港開発事業[i]」が最初の担当案件となった。100 億円以上の案件で大きな課題を抱えていたが、周囲の先輩の仕事の仕方を見ながら自立的に仕事を覚えることが求められた。その後、組織再編により JICA へ移り、2010 年 3 月まで中南米部に在籍した。
多岐にわたる業務を経験し困難も多かったが、最も大変だったのは、JICA 退職間際の業務。チリで発生した大地震の緊急援助支援に携わり、終電で帰宅して翌日始発で出勤する毎日だったという。「しかし、当時の苦しさがあったからこそ、今の私がある。様々なことを学びました。」と断言する。

JICA 退職後、日本の大手電機メーカーに転職。ブラジルでのビジネス拡大に関わるプロジェクトチームのメンバーとして迎えられた。日本での業務に加え数か月におよぶ長期出張を経て現地での複雑な手続きや調整に苦戦しながらも成果を得られたことに大きな達成感を感じた。
その後しばらくしてコンサルティング・ファームへ転職。そこでも厳しい世界が待っていた。官民セクターでの海外調査業務を担当し、多数の国の案件を手掛けたが、日中は多忙な上、調整会議は深夜に始まり、未明に終了という時期もあったという。「自分の未熟さを痛感し、精神的に辛いことも少なくなかったと思います。しかし、振り返ってみるとやはりその経験もすべて今に繋がっている、一皮むけました！」と笑顔で当時を思い出す。

谷口さんはその時、ブラジルで公務員となっていた恋人と 2013 年に結婚、その後彼は休職制度を利用し来日し、同居生活がスタート。間もなく長男も授かった。
しかし、政権交代がもたらした公務員制度改革の影響で、主人はブラジルでの復職が迫られた。
これを受け、谷口さんは務めていたコンサルティング・ファームを退社し、2016 年、家族とともにブラジルへの移住を決意。「いずれ、ブラジルに生活拠点を移さなければならないことは想定していましたので、難しい選択ではありませんでした。」とその時の心境振り返る。

娘の移住は実家の両親には複雑だったと思われるが、「思えば家族はいつも私の意向を尊重し、支えてくれました」と感謝の気持ちを表す。
コンサルタントとして勤務していたころ、夜中に泣きながら実家に電話をすると、深夜にも関わらず両親が心配して実家から駆けつけてくれた。ブラジルに恋人がいると知り、「彼氏なのか」と不信感をあらわにした父だったが、結婚前に初めて会わせたところ印象が一変、以後は「べた褒めだった」という。

そしてブラジルで結婚式を挙げることになり、ヴァージンロードを歩んだときも、遠く日本からかけつけ、目に涙を浮かべながら寄り添って歩く父の姿がそこにはあった。

ブラジル移住後からおよそ 1 年後の 2017 年 3 月、JICA ブラジル事務所（現在のブラジリア出張所）に採用。
「案件の理解とともに事業実施に必要な JICA 固有の手続きを適切に進めていくこと、それらを踏まえたうえでのカウンターパートとのポルトガル語でのコミュニケーションと、現場で臨む久々の ODA の仕事に最初は困難もありました。対外文書を一つ作成するだけでもかなり時間がかかりました。」
しかし、徐々に仕事にも慣れ、持ち前の粘り強さと、仕事をよくして行こうとする絶え間ない工夫と努力により、ほどなくして円借款業務ではリーダー的存在になった。

「在外事務所での仕事の醍醐味は、やはり事業進捗を間近で見たり、完成の瞬間に立ち会えること、現場のカウンターパートまた時にはその先の地域住人たちと触れ合えることです。」と語る。
そうした「醍醐味」のひとつを味わったのが、入社以来担当している「サンタ・カタリーナ州沿岸部衛生改善事業」[ii]の完工式でのことである。
複数の下水処理施設を抱える同整備事業の最初の工区の完工式典。コロナ禍で JICA はオンラインでの参加となったが、式に参加中、それまでの苦労が走馬灯のように思い出された。
工事が思うように行かず、何度も止まり、そのたびに実施機関との議論、本部関係部署との調整に奔走した。建設業者選定のための入札プロセスがとん挫することも珍しくなく、ブラジルでの公共事業の難しさを見せつけられた。
こうしてようやく最初の 1 か所の下水処理施設の完工式を迎えて万感の思いだったが、ブラジル実施機関から謝辞が述べられたとき、担当者「エリ・タニグチ」が当時の苦労話とともに紹介され思わず涙が頬を伝ったという。

「自分にとってＪＩＣＡとは何か」と聞いたところ、谷口さんは「ズバリ、自分の『居場所』です。」と即答した。
「これまでの人生を振り返ると、ラジオ番組を通じたボサノバとの出会いから始まり日本大使館、ＪＢＩＣや電機メーカー、コンサルタントでの経験等、全てが今に繋がっていると感じます。例えばメーカー時代のブラジル進出事業で培ったノウハウが、不思議と今の海外投融資でのある業務に生かされたことも。これまで何度も泣いたり苦い思いをしたすべての経験は、今、私がここＪＩＣＡブラジル事務所で仕事ができるように必要な経験だったと確信します。」

谷口さんとＪＩＣＡとの出会いは、運命だったのかもしれない。

そして 2021 年 10 月、谷口さんのＪＩＣＡ人生は一つの節目を迎える。ブラジリア出張所の事業全体を総括する「業務班長」に抜擢されたのだ。

■「サンタ・カタリーナ州沿岸部衛生改善事業」での現場視察での様子

「それまでは円借款や海外投融資の業務が中心でしたが、班長になって技術協力プロジェクト、課題別研修、三角協力を通じたアフリカへの支援等、他のスキームや分野について学ぶ機会が与えられました。
ＪＩＣＡ事業がいかに広範囲で、経験豊かな優秀な担当者によって支えられているか、痛感している日々です。この機会が与えられたことをＪＩＣＡに感謝しています。」とほほ笑む。
「班長になって業務量が増え、子育てでは主人に頼ることが多くなりました。私を支えてくれている主人にも感謝の気持ちでいっぱいです。」ただ、「仕事しすぎじゃない？ここはブラジルだよ（笑）、と愚痴をこぼされる時もあります。」と苦笑する。
「子育てがひと段落ついたら夫婦でヨーロッパ旅行をしよう、と主人と話しています。」という谷口さん。今後も自分の「居場所」である JICA で成長し続け、ブラジルで多くの成果を残すことを期待したい。

■ご家族とのひととき

■谷口恵理（たにぐち・えり）
千葉県野田市生まれ。獅子座。ブラジル人の夫との間に子供 2 人授かる。
2017 年 3 月ＪＩＣＡブラジル採用。現在、JICA ブラジリア出張所の業務班班長。
趣味はピラティス。最近の息抜きは「子供を寝かしつけた後に少しのお酒とおいしいチーズをつまみながらの海外ドラマ鑑賞」。
人生のモットーは「空けない夜はない」。

※～シリーズ～「JICA で働く人たちのヒューマンストーリー」では、ブラジルで国際協力に携わる JICA スタッフを紹介します。仕事面のみならず、これまでの人生や家族の様子、エピソード等も交えつつ、「人」としての姿にスポットライトを当てることで、ありのままの姿をお伝えします。

---

[i] 中米エルサルバドル東部に位置するラ・ウニオン港を国際貿易港として再活性化すべく新たにコンテナ優先ターミナル、バルク優先ターミナル、航路、アクセス道路などの施設の整備を支援。2001 年調印。借款額 112 億 3300 万円。
案件概要→ラ・ウニオン港開発事業 | ODA 見える化サイト (jica.go.jp)

[ii] ブラジル南部のサンタ・カタリーナ州沿岸部に所在する 5 つの地域において下水処理施設の新設・拡張を行うことで、下水道普及率の改善、ひいては同地域の衛生状態の改善を目指す案件。2010 年調印。借款額 144 億 2600 万円。
事前評価表→2009_BZ-P16_1_s.pdf (jica.go.jp)